風俗文選

二

へ 5
1879
2

巻二

へ5

南都賦　汶村
吉野賦　丈艸
冨士賦　嵐蘭
前磨山賦　支考
鎌倉賦　許六
松嶋賦　芭蕉
湖水賦　李由
後磨山賦　去来

風俗文選巻之二

五老井許六撰

[印]

○賦類

南都賦

汶村

○あをによしならの都は、むかし三笠山の麓なり。元明天皇和銅二年、藤原の京より此京に移さるる。大宮居ハ佛庵佛神をあがめて、玉淵を輔く。若宮は春日の寶龕、堂の尾上の文鏡の神に、橘の唐継をも川に浮草なる宮に、康勝造の姫よ、氷室、率川、東大寺の八幡、二月堂に若狭井あり。二月堂の呪師、鵜縄を、久しき大門の折釘に、狐の幕を張。眞福寺を

七堂伽藍ハ名に高き山階寺といひ。中比ハ厩坂寺と号す。東
金堂。中金堂。今ハ無し。講堂。南円堂ハ。御詠歌の布施を
うけして頂礼乃札を納ぬ。東円堂といふハ。こゝに八重桜
を移しもと花垣の庄を領ぜり。西金堂ハ猿楽とあらはす。
南大門よりいりて。薪乃能をもよふし。七度半の使ハ座衆
乃猿楽をめぐる。西天より経を踏で戒法の芝にて薪を積
ぐ。禅僧より禅乃ますゝ名人の手を見る。大会の芝居
盧遮人の名をあらはす。後ハ猿楽の能。若宮の能。春日祭の作
祭。素絹に大衆の装をはくみ。大華表にはうかれ。錦を
着く。妻の下にも矢根立合を乗ハ。猿楽乃児ゝ。獅子の
衛をかけ。赤衣乃仕丁に棒を横ふ。大名馬。大名諸大名

持太刀持。競馬。流鏑馬。長谷川党ハ甲冑鎧着して。渡る
乃児ゝ。猿楽より夫をも持。関白代々束帯して。森の宮を
かざし。バチヨわ児ゝを従へ。楼よお殿をはなれ。バイそ
乃神がお祭りの神子。細男。御宝物楽人。ドカ之拍手ゝ伝
下乃宮。老若の御幣。田楽乃ビンザサラ。まつ二月乃春日
あらしみるゝ。霜月のむをさかゆ。手向ふしぐ。万歳乃御
要祝し。末葉にまで若草をもかむ。雪消の沢。野守の
池。御手洗川。佐保川。一位二位。三位の橋。馬出し。東大寺ゝ。五尺の橋
乃瀬。雲井の瀧の森と神垣。子守乃社。地獄谷。千手谷。鶯
塚。遠太郎むかしかな。井坂手嗔を祈つ。羅の
羽音よいまた筝をさすり。南ゝ春日山の御詠ハ様

澤乃池に浮ふ。衣懸柳ハ良辨杉。夜泣の地蔵。文使乃紅葉も
鐘も名に讀る。鹿乃子か疵となられ。十三鐘る。七ツ六ツ乃間
にはく。蘭寺。紀る。般若寺ハ大塔の宮を隠し何の跡に
る。義経の鎧をとらむ。二月堂ハ治承に焼。松永る乱禄に
と。後乗院乃跡をふむで。龍松院ハ新をおこる。興福寺
伊勢の行地をなし。柳緑花紅乃碑る。猿巴乃
色をしと也。華原磬。泗濱石。葉衣の伽藍。野乃色の
屏風。柳葉乃釣術。宝蔵院乃十文字淺る猶も
大和乃豊心丹。法論味噌。力餅なら漬。奈良酒。
物なしく関屋。曝世に名高く。打物。中継
木の紀る。岩井か奥足。文殊か打物。膠縁あり。鞘乃

皮。古風名。灰炮烙。櫟木珠。なし家やチウと名つき蓋なと
硯水とい。池胴乱。夕合孫冝。乞丐坂乃石。緑の村の木猶る。
赤さき物。姥乃赤飯よたく渡る人に。金堂乃証
杯といふ辻乃鳩。鳴川の別も。情よ万金なき
よ一命を捨むも。四ツ七口。京ハ八条。町し御門の奈良
て。京三条の巻をとらり。其その記。是様乃なりとし
旅人よこころ。是等四郎の。おわなき道
いかなし。

鎌倉賦 并序

許六

支祁揺る。後倉ち頼の名にして。大職冠を公の時雲

夢まぼろしく跡を探むの地也こゝ乃ゆゑに郡乃名とぞ。鎌
倉乃時世ハ執追捕使として。文武の御守しかり。聖武乃
神亀年中かくて御みそぎ勅より上総介平直方卿
に賜して八幡太郎義家朝臣より。源家代々居館
の地なりき。賦して曰

〇三代乃将軍、九代の執権。其の死さけバ。始の何某三
都しおもひこそ移りし乃里。鶴が岡。雲井の影すみ尊氏に
頼義朝臣の建立して上乃若宮まで源二位の敬神あり
宮柱ふとしき立て民の心ん捕と社へて江の島ハ辨財
天。江の浦に陰てし杜戸の明神あり。鳥合が原ハ御旗入居が
瀬大乃跡。由井の濱を下河邊行平月が岳蛇と樹神

不変坂稲村が崎。七里濱腰越が谷より。扇が谷より
佐介乃役の跡あり。腰越乃寺まハ。兵庫が申状の下書を祈
し兜が淵てしハ。白菊がうれ朝みとを止む。行合川より
家なる親王みち気をうけし。滑川ハ青砥が銭を捜す。日
蓮盛久が首の座。扇清めてより龍の口と大塔乃宮
倭臣の跡なるしみ。實朝のたハ公暁が為に弑せられ。勝
長寿院より義朝乃髑髏を葬る。法華堂には頼朝の墳
墓とを築く。あり上人ちご夜よ軍兵を遣。定家のてらぞ七
まわすを誅ども。化粧坂をかねよ名とるく。神奈乃案内
をたすね。和田ぞ畠山氏平と小澤。石橋山の飛鳥居
補。佐々木盛綱ハ馬ひやし場の水あり。正宗が四海よハ来

かしとらわかよハぬ旧なりし。名よしの地名ふ。武相の境ふし
六浦金沢ふ。むさしの地なれ。瀬戸乃明神よハ。四境一覧の眼
をさらし。能見堂まよハ。八景絶頂の詩を見る。照手の称姫
乃松。金沢の文庫とふふ。称名寺よありて今なし。文
殊像。普賢像。さくら梅。桜梅。さいて梅。青葉ふ。紅葉ふ。
ふあ梅。ざくろの二梅をとじ。たきさんらふれ。称名乃
からのまたとく。広き野ふ。固くし海乃しれをと。今から
雅なびよしの村木町といふ。大磯の宿ハ。遊女町の繁昌わ。
されども東南よ海近く。西北よ山つらなり。境地狭くして
まぞさ谷くれ。あら。なくしれ。盤石盤崖た。濁せば。
すんぞ今乃泰平ふ。雪乃江戸よ及ばじや

そきさらふ界をつんる。扇ヶ谷。亀ヶ谷。梅ヶ谷。松葉ヶ谷。建長寺。
浄智寺。円覚寺。寿福寺。海蔵寺。石切玄翁の窟。
松が岡の東慶の尼寺也。籠釈迦。鉄観音。深沢乃大仏。
長谷の観音を洗ひ。星月夜の井。極楽乃下ふは小坂ハ坂
牛めくらから成就院をそ見。小栗乃判官ハ横山が強盗を
除る。阿仏尼が明月記。これ御作像基乃紀行。ますハ雪の
下より花を踏で。清を出る。山の内よ鶴を行く眺め。
春なふ鎌倉の月。御輿が嶽乃月。磯のあしくら。感慨乃
情をまし。鶴乃多ふ。懐旧の情を動。鐘を萬般が華す
いやしめたる府の業。螺ハ寒午が蒲用を称ナて。岩。摩訶論
元業羽をくろく蕉鰒の類。あるくぐきいる白雲くどころ漂

芳野ノ賦

支考

芳野を古吉野とつゞけて金峯の地なればなり。山。川。里。嶽。谷。橋。尾上。山の井。花園を詠ぜず。すべて二十一代の歌数。三百七十余首。猶家々の集。或ハ類題。続連俳諧のそぐひ誰川田長ハがあされし。貞室老人乃これハしきぞ。かるがよもしいとまなからんにさればハまろうしの吉野ハ。おもひめりちさきみ乃俳諧乃所にわ始まり。芳世川花の名するとハ道徒和尚なるたきになる所の手柄なれバ。川もぐ巴り樹にわまき紀紀の紀伊の川合の山にも落。山ハ大峯よりつゞきて。那智高野にわたるなれバこそ。蔵王堂ハ。こゝろにある安置し。一郷とあり。上市にわたり飯貝にまでわ。下市を出してハ。六田にのぼる。妹背山を過ぎて高取の城にむかふちとせの桜日おち花。桜田乃谷さくらが嶽。関屋の花。流れざくら。雲井桜。布引乃桜。花矢倉。花籠の水。嵐山。象山の桜宮にまいり川を越え。袖振山なり。天武帝ハわか節乃舞を始む。清見原乃天皇ハ。栗栖人乃の御まうかし。後醍醐帝ハ。吉水院を皇居に定む。義経ハ此院にやどりて。秀吉も此寺を本陣として。賀名生まで要害乃御所。如意輪寺にハ御廟を築く。厨子のうしろにハ蘭帝勅作乃御像をこうけあそばし。過去帳の奥にハ。楠正行が辞世の歌をとゞむ。判官の鎧。弁慶が太刀。ロある山門ちとせの

痛腹乃ホてーど空を右往が空腹の地なれ。携まる御家
龍よりハ静が寧の叢沫を納め。子守乃杜屋乃二ヶ所ら宮
家にお素頭 癸上乃桜将軍 吉宗公御手植わ 桜木乃てる。金輪乃明神。力え乃
不動。已つ沈落。呂等乃御。新まよハ。花後黄お餘をいれ。
あ星むち。桜本て崖山の先達也。大滝ご目黒。石河の滝ごる滝。
蝉が瀬。清明が瀬。菜つきハーやく〳〵乃清み乃わ象の鳴
神子乃おら鷲る尾の鏡龍延し乃岩。亀石。夫婦石。大杉なん
鬼婆ヶ岩なる乃茶井。摺鉢乃松。ゆるぎ乃わや猿ヶ滝ヶ坂。
琴畳。琵琶山。まき根ヶ岩。駅路ヶ嶽。七十二乃峯。八十乃窟
さ遍き嶺。逆二り乃通路なるべし。産を頭巾にほらの
貝。犬打。濃州紙漉。葛の樋。くもえし釣。雛鶴。擦すれ乃んす。

数細工。本郷村。山お牧。さくらハ寺中よ名ぐわりき。
しかるを桜まで名を挙ぐれ。麓より奥の院まで
太子山し。前後乃谷し。中にも寄をし覚きよしても
をさく成かでし。海石乃咲ざ多き八房も乃波を揚
本のらなる嵐き。登りて雪をさかるも。麓ちらや
奥まで。峯落山の洋源より飛鳥山まで。
いづれも花の盛なる時ハ。皆もらじ。吏桜の名同じ。
仮葉桜。江戸ざくら。大桜。樺桜ざくら。
乃ありて。いへは寛く。濱よ咲とふるかや熊坂
とりひ。楊貴妃と。世よ名高き杜若。八橋とこれ也。
よく雲雀荻を。宮様と号き。されバむしる也。

ちりさくらの名にきけど、いつも花をきかず。さらに古や
とも桜さく。理原をつきぬることろみな神。

松島賦　芭蕉翁

そもそもことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風
にして、凡洞庭西湖を恥ず。東南より海を入て、江の
中三里。浙江の潮をたゝふ。七十二峯、数百の島々。
欹ものは天を指。ふすものは波に匍匐。あるは
二重にかさなり、三重にたゝみて、左にわかれ、右につらなる。
なるは肩にあり。抱るあり。児孫愛するがごとし。内
よろこびがほなる子。鎧島。ふでしま。牛島。帆しま。内
裏島。屏風じま。籬が島などあるうちの中の濤つきなく。
霜王の川越しよばれでかれしけしよみえし鐘を
聞し末の松山となりて、松のひまひま墓を築
く。羽をかはし枝をつらぬる契の末も、終にはかく
のごとしと悲し。野田の玉川、沖の石、みやぎ野の萩。
武隈の松。境に名をなしべきまり。志がもの浦まで。
塩が名所あり。神おのかたに道籠。文治三年
の三郎奇進と記を旅客が磯を拾ってよしとて。雲居
禅師の別室あり。しよ。坐禅石。瑞巌寺は、御
何より入の建立。当寺三十二世のむかし、真壁平四郎
出家して入唐。帰朝の後開山を、ちと伊達政宗

興して七堂伽藍となれり。法蓮寺を海岸に

侍る老松影をひたし。花鯨波にひゞき雲の緑にうかび

かゝる枝葉浪風に吹く思ハ絶く。屈曲をのけて立たる人

さるがごとし。其気高く宵にさして鬼人の顔を粧ふ

ちるや振神のむしく大山ずこ乃なきるたさりや。造

化の天工いつまでも人の筆をとゞめる。詞を尽さむ

冨士賦

嵐蘭

不二ハ日本の蓬莱山也。むかし孝霊のとき一夜に出て

先て現ぜり。徐福も此山に登りて仙薬を求め。かぐや姫

も此に化して今に霊とあがむ。三子ハ八葉よりいでて

根ハ四州にまたがり。街道路ハ三口よりはじめて千万

ますぐにまたがる。裾野ハ東西に長くして百里にはびこれり。

形ハ川をそそるがごとく。ゐるさま小斗に似たり。都

陸に旭をかゞやかし。黄天に雪をのせて。山崩に海を

まへ。山上に大沙を攀。相生千年の類まである[illegible]

三千余丈とも称して。義楚六帖に見えたり。[illegible]

武蔵野ハ東夷をきはめて。草葉乃[illegible]をあらはしぬ。

たゝかひの[illegible]を[illegible]めて。牧狩をも[illegible]

嶋[illegible]の流を[illegible]仇名をとゞめし。人穴乃奥ハ。仁田が

無[illegible]別[illegible]十郎の[illegible]。[illegible]社[illegible]ハ[illegible]

文字をよみて。探題[illegible]集[illegible]。[illegible]ハ[illegible]

乃序は二流にしたがひて、廻船に怖れて、一人
八寸の号をとじむ。禅定の人は、宝冠に頭をつゝみ、
下向の衣は、小袖の裾をからげ、絶頂の鐘は、峯の
雀巣鷹は大心にして、伊与の雲山におとしぬれば、雪
乃羽毛には臆病になりて、飛のすゝの逃路に涼し
吾。不二亀天。冨士茸。吟下黄葵。栗子。柿。松。橋の本
松そくひ。往還は竹の下越。根原あらし、御殿の足柄の関。
横ばしりの姿あやしげの後にて、作夜からし越。海を渡
箱根を越ぬ。三保清見寺乃見越、八ツ谷山にかゝる
具本。由井乃橋上には馬上より人の背をめぐらし、赤坂
駿河、蒲原にして、梨地に窓に騈をさされ、遠くしるし

鱗びをかざりから〳〵ゑ家より家の枕を二つかなしぬれば。
訪諏の坂には倒乃新を渡し。男別の府よりこの
峯はほくして扇の絵のごとくなるべしとぞよ。詩
句連俳の句数各いくつも作をはりしば、大かた此山の高
さよりは猶きびさ。神代古今の間より一首秀逸をなる者
も、吾人の口妙なるべし。只此家をば此山に対しく。
力が一首も及ばれ。吾翁、冨士吉野の句。一生すなしとぞ。
東路に執ある人も、かくなもがらむ、此の徳には無力を
費し、又あづま路におもむかぬ人も、かくのごとき難き
冨士をさへ見ぬにして、一生を終るも、甚すし残多き
ことなるべし。

湖水賦

李由

○近江ハもと淡海なりしを。大宝年中にあらためて。近江
とハかきかへられし。遠江に對し号をとしめ。仁皇十二代。
景行帝の御宇。滋賀の郡に。遷都ありて高穴穂宮
に行幸ましく。三十九代。天智帝。大津のみやこうつし給。
廃帝乃御宇。保良乃都をも近州にうつし給ふ。火八十二
郡。保羅周澤。稼を倍し得。春氣早く到り。因本四
萬。大よし園しの稼を。仁皇七代。孝霊五年。地裂湖
となる。同時。富士山現ぜし。故に不二と徴定する事。
近江の人を此人逢とさふ。善積一郡ハ。已に湖となれ

て今ハなし。足神の保良ハ今一村残りて。古郡変じて。阪田の
新郡に属せり。国中余吾。織江の西湖あり。是も大湖
とつながりて二里あまり。湖を長うみと称せる
西の邊に琵琶湖のある也。形似たれバとて其名とす。作る波
寶岡とや。風土記にあって。樂は波や丹穂てるなり文宣。
萬葉にもはらかすかる也。東西十里。南北二十余里。其
乃あたり隣所。八百八川。湖を囲む。小郷本百余村。中に
大小乃嶋あり。竹生嶋ハ周廻一里。寺院九坊。弁才天女を
あがめて。呉越の神妻あり。宝満乃秘密を
封ずる。経政の樽をとどめし。其跡ハはるかの中に
みえしを。沖の嶋ハ。沖津嶋山にしてよめる。渚へ入くる

すなはち白石と呼けり。四石湖上に峙つ。樹木一株も不生。
奥の嶋ハ人家数百軒の表を座とす。猪崎。黒
嶋ばの八嶋なり。嶋ハ承るに巣はなれ。勢田の
中嶋に八蛇輪しあれ入亀が出る總の二ツ嶋ハ松龍ヶ江
乃中に浮び出るを比良明の響をかさとし。膳所
吹乃新なとり川を。橋を勢田。長柳乃橋。松ハ唐崎
千々の雲。蓮ハ支那に名こるく。蓴菜ハ四川に
肥へる都。大根。兵主蕪ハ膳所牧谷。粟に次絹こる宝
布。野洲ざらし。高嶋硯。未作黒。白砥石。舟木材
木。鹿を石に来るに似しく。比良山の熱湯ハ大溝
乃白石（是方解石也）伊吹乃艾ハ営る妻が口。艾石灰等

穂乃類まくも。岩茸。日野ノ椀ハ舎津乃根木。ありし
き焼ちこる鋳器乃手也。混元丹。百々菜。帙ノ田楽。
醒ヶ井餅。多賀。姥子。瀬村。鴻。四十九張乃きる陰。
池の川 総計ちる山 雛。国友鉄炮。表作判の小谷外。
（是ハ柴田勝家之製。草中兵粮ノ助トス）端尾のチバン。（作々木家ノ臣達磨也其子孫ノ蓄農父ニデ于今着之。）
大津にるを荒弾材木を飛し。膳所の生食しる也小浜
わかるは湖中乃猪ヶ久こ。尾上乃山に綸青とかへ
ぎこは石恒つきハ阿蘇人を天下に用ゆ。白鬚の浄
神ハ瀬名ノ七度乃是ノ原を見すし。移り岸にけ神
を。日吉の御廟也。多賀ハ日吉乃神に社ハなりし也
人なくして更なれ。筑摩の神を鍋の数に名こるく。

新羅乃社ハ源氏の太祖なれ。威を益しけり。大津四
乃宮の神社。今乃浜乃八幡宮。豊満の神ハ八幡宮を
志つゝ。宇賀野の神社ハ。式十四座乃延喜也。唐崎山
のほとり神ハ幾津彦根命と申奉る。金徳乃由称
多れけバ。金亀山に跡を垂るゝ。すなはち平田山。鳴宮乃天
神ハ清川皇后也。流天神と云。天津彦根命乃
子にの神にて。千々の松原に名をとめし
神代[illegible]はしまして。大神宮[illegible]の祈り給ふ。
荒乃根山より出る也。山上乃観世音。堀川乃河堂。
寛治二年。白川の上皇。清水寺乃跡也。神小社佛
閣。金龍山乃深きに跡を轉で今の小野
寺に関出ある也。石山ハ観音菩薩。石の白瑪瑙。山も
黄金なれ。皇都金山の始めとて。三井ハ園城寺と
名こゝろくむしなからの山よりも大山となれバ。
延暦なるをきハすなはち寺としけるハ園城寺をさ治世に伸
出しける雲母坂也。坂本西教寺ハ天台に浄土宗の一宗
寺。堅田乃浮御堂ハ恵心僧都の千躰仏を安置す
傾礼のれに居まし。膳所乃石動るハ。樺飛の衝に名
あらし。矢乃焼ある。かの比良石塔寺に八天竺
阿育王の塔をとし也。是所謂八万四千塔ノ一也。日本ニ来止。三ツノ其一也。平流山也。三国傳記ニ云昔
何甚四十九院をそてく。都率乃内院と称なし。
神雲山ノ一峯ヲ盗ミ。湖水ノ瀬ニオロス。其下ニ
慈テ石ニ化ス。今ノ荒神山ノ蛇石是ナリ。
永源寺ハ寂室

祇乃一字なる女人ハおもき罪となぞらへ。番場の道場ハ。
一向宗の源にして。仲時已下の過去帳よりハ。如是
畜生の亂文よそしからぬものなし。百済寺ハ下の葉ハ小野
道風乃生ひ頃。池坊乃八大の絵ハ。金塚(カナツカ)の観音也。山灘寺ハ
佛ともに道誉が菩提所。コンクハイ乃称え。白髪こそが寺也。
敏満(ビンニン)寺般若(ハンニヤ)坊よハ。那須(ナス)与市が乳出をとゝむ。野寺ハ
摺練貫(ネリヌキ)乃如く。松尾寺ハ本尊ハ飛行乃通か遠(タニ)て
小野の里寒れをかさね。尾屋(ウハラヤ)寺ハ太子。天王寺の尾を
ほそうせて。名残里地よ埋て今もあり。東西本願
寺乃御坊。浅宗一岳の奉し。清涼ち。龍潭寺ち禅
乃道場。宗よハ千山をとゝ。門よハ万里九泉

をとゞむ。観音(カンゼオン)寺ハ世よ菅(スゲ)乃寺と呼ぶ。佐々木家乃古跡寺
也。安土山(アツチサン)摠見(ソウケン)寺ハ信長の御跡。日本天下を治て七重乃
天守を建賀(ノビヤ)ぬ広間乃名額(メイガク)は寺に移る。観音寺ハ
乃城也。まさに観音城也。今は浜の隣ちゞ。太閤秀吉より
の物神坂本乃城ハ明智(アケチ)光秀が縄をとそ縄うとも佐和
おなじ縄ハ蒲生(ガモウ)家よおつるも。六角京極ハ佐々木のまぎれ
なり。稲毛(イナゲ)三郎ハ佐々木(グゴ)の孫を紀て。多くの勢を治し。賤(シヅ)
が嶽(ダケ)の七本鑓ハ後代よ名を挙(アゲ)しか。其乃近江(タカニ)の長浜ハ
甲良(カハラ)乃庄よおいて名を後東よ伝へ。鍛冶(カヂ)の貞宗子多。
ちなみよりく名を萬人に揚(アゲ)しか。猿丸黒田乃田
殊をとよし。老僧元政。吟菊。此ふ乃名也。すゞく

所々名所一百余ケ所を撰集てぬるこゝろすくなからず。
近江八景ハ騒人墨客これを翫ぶこと誠に近衛政家公
の所をえらび給ひ、国中ふるに秀作なくハ流なしや
戸に清濁をもちて、うるは言葉をはふくに似
しま。又菜に宜し。世に川魚といへるものハ湖魚のすゑ
なり。汐なし魚遊ぶ乃心となることもなし、されバ大網巻網
四手網。魞魚。平丸。唐網。魞。魚梁かりし。竹簀あさりのまた
まで乃あつ稼もふくまるべし。鯉。鮒ハ其から尤すなハ鮒乃
品類。鰌のたぐひ、右かぞふにいとまなし。春ハ山
吹の花をやさしき。秋ハ鱗に紅葉をちらしも。江鮒。鰣乃
名をまして鰣。鱵乃味をもぞ川。これよ紀あらは魚と名

づけ。鯰ハ玉嶋より十里もとゐをもとりしや。勢田鰻。和爾鈔。氷
魚乃近江にかぎる。内膳式云田上ニ取送シタルヲ宇治ニテ取九月ヨリ十二月ニテ供之氷魚ヲ捕モノヲ細代ト云
不賀比鮒ノフトシ。鮬ノカト。鱣ノヒヲ合テ。其形トスル魚也。鮎。小鮎。鰷。鯽。水鮭子。山椒魚
牛。鰱。蟹。小鰕。蜷。蜆。蝦。石亀乃あらい。獺ハ魚を
祭るも川名所ハ相模をめぐ。舩にて大津唐崎とし称をバや
ぶ乃湊津し湖に大鬼子。小鬼子。小なかやの川添に石を本
名ありこる瀬。伊馬ハ川も舟なれ。段平よ大石を積ハ。舞ハ耕
作乃舟にまさ也。唯肥付馬不気ニ舟数ニ棚なし小舟。田舟。ひらた乃ハ諸
を舟人湖上の風をあそ談論すとしハ風乃さふらふね
といふトイテとふハ日和風ハヤテとしハ西をさそふ。勢田嵐。
伊吹ハ風。ヤイセ風。ナカセ風。サキ風とす比良乃名よ

しも秋のころ日あらし也。根まさしく湖上の風の
若しくは月にては瀟湘の雨をながめ、群仙の老人
は路頭に吟じ、あさ夷の鶉を袖にわけし。山吹の
瀬よりこぼるゝを、くみ吾妻も鷺。老翁の時雨。白露。鶴、
水鶏。鷹も此川に帰て、石山とゝもにや。王の
後の都をおもひしては、新業の佛像を供へ、在世の夢
咲てる。藤堂家に花を捧ぐ。鎮守の社の宝は、神
代の御法にして、花沢の花は今も咲なれば、龍灯松
など三井寺の秋の月に光をあらそひ、大藪の雨夜には星鬼の
火を美よう川を挿し、八十余方右をしかるに年中
きて年々の貢を備、大津の乃稲穂を奉るもの

此湖の深ひなるべし。

前磨山賦
磨山者丸山也。在肥長崎歌舞之地也。
支考

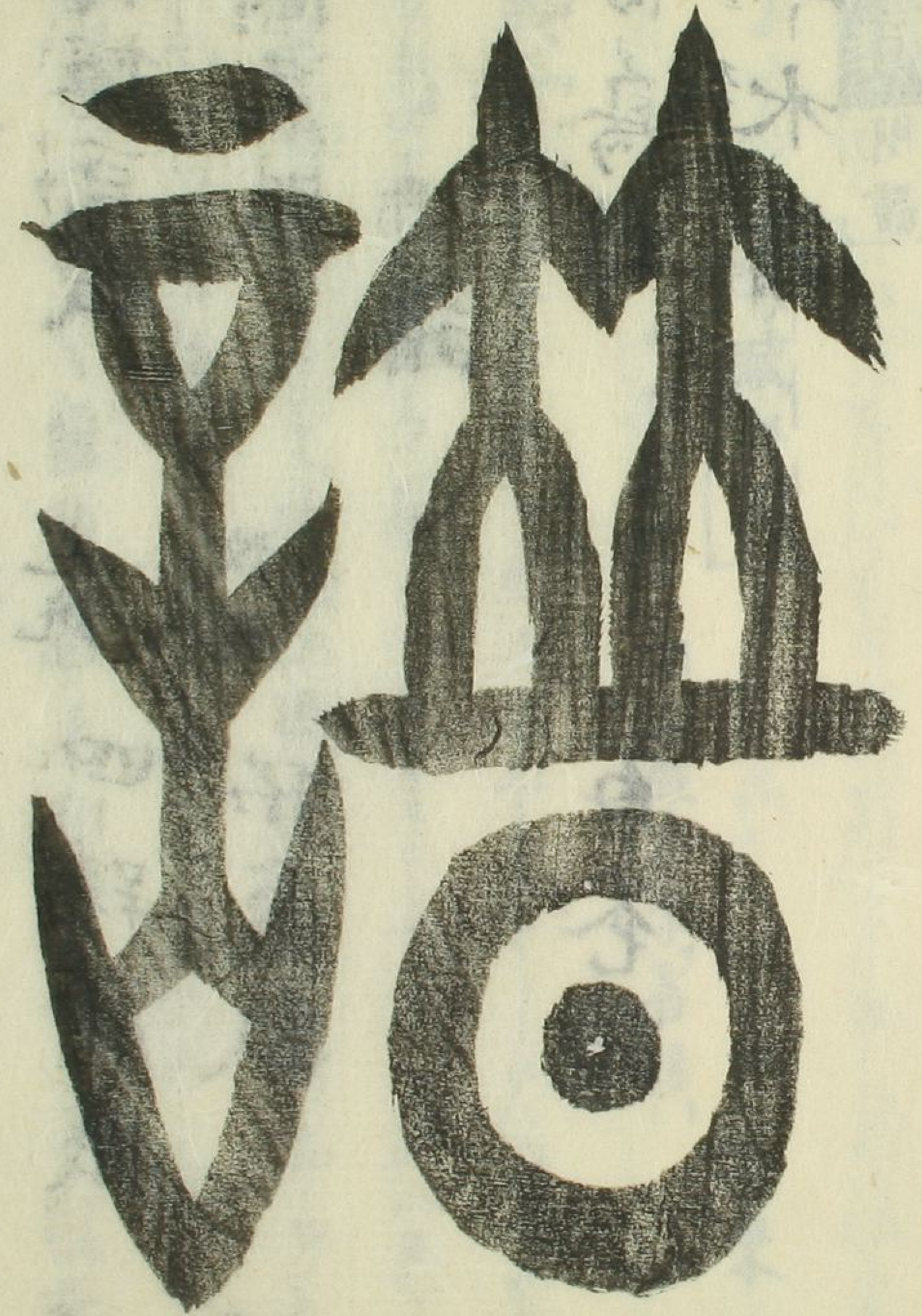
○七月十日がふるき二方の子日乃功徳とかや。誰にも女の親
ときく。あの湖の日なるべし。此津の遊女どもが人もなん
人まもえて袖むしよりて日ひさけるにゆきて逢に
よんでぬめきせて袖て、花ずまのたびさ合する世迫
なる。男とも女にまみて見とも見ゆるべし。さらは深
東の世まうり袖く身をあふさわと見る人は浦の見
深めんも、いみあふいなりん。今さし出るゆ是る
筆袖とたた乃客居づしふ行ぞれて都のとき示

おりんしうつ手をもておかるゝまで兎角といふべき何心なく
しら紗濱吟あしとかへる。雁乃花みんとあるまゝ手をとらへ給ふ
ひとつはいさゝか一つなるあそび人より訓をく。あさ出一夕のまなら
ひもしらず給さへにいけまよりおぼしらまじゝる。
寓むもの名たし猫のやすむ兎どもと

後磨山賊

去来

○十日八日あすからかしこに紀ちくいあかしてちり紀の山寺に備せらるも
ものぞく乃秘女房乃月まうでゝあるなれ。席士丹もへ川
ぐふ湊あれば浦人ども日まさんうちさふ尾て松川のおも
あらわれては眷の家処らうくかほる。須磨乃石の大将にも
咲なき給てぞろかんをとおひ駿く寺のんそ絹の弁まで
もそれは世をちぎれ。浩窓に吉乃下よなくく。一もし
かの所まおおかしむ人もあるべしとあらぬんさへそれぞ人
にの給てられし。足取しやうらくして乃。そがの由秘ある寺
おぢかんべしあそびむすも。難波乃浦のあしさまよせ
こそ思ふとゞ。秘からすゝ子安子のそれ。何さよしとのこさひ
あるふづれて。秘の商人も。手紙はあつかうまし紀かしおかし
とりやかくるもなどはいてつるべき。今年のほどには余
ぬすみをら花坊よ。しなる紀の賊つくわもうりと何のあら
き給て。紀よ侍の賊どもぬしといふわ侍わる修。
いふはるやせ乃傾城とかれまくら



鼠賦　去来
旅賦　許六
揚揮箟賦　毛紈
四睡廬賦　李由
閑居賦　汶村
招寛賦　支考

附譜

百鳥譜
百菴譜
山水譜

風俗文選巻之三

賦類　附譜

五老井　許六撰

鼠賦　并引

此賦以五音相通假名字為韻　去来

鼠ハ一ッ乃名をよめが君。又よめともよめかといへり。ちゝね鼠
あれハ四足の鼠を鼠をつまみとして大なるハ五六寸。ちひ
さきハ寸あまりなれど。山椒の眼。小豆乃鼻。歯ハ糸を這
きそふ小袖も隠べく。耳ハまさに青のめ、に似たり。
尾をこまかく錐のさやとなさばなし。背膁の
あたゝめそく。ふくも濃も深せず。宵やのち夜中て
音は渡る事なめすことをとゞめる其みかてうれぬ、

ひへきたれ一行るる。乃賊を作りて曰
○二月鼠の穴を塞ぐべし。世が所さつらさをおすへし。
君て人をおそる〻ハ足乃うら乃癬おそ〻(ヒ)。酒をの豊
みの世の酒るひとしかれど。いけしの沈酔をつんと。(ヌ)栗ある
垂し。慈をそこなふ名を甚変るにハ(ニ)。太棗をうむ酒に
海行バ。病を生じ。(ヌ)なりしな多をちらし。男女乃中
ともさあ(ナ)ぞおやしき巣をはらって。源平の乱を生じ。(ク)
行い。息つらひく傷人れさめしはれ。から猪(ヒ)いのれをくぬへ
ての書を焚代乃寡植となりしぬる(ル)神体乃五ち本と化も。
永棗よ訪かしまされ(ル)行るぞ来れ根を不伐得り鼠を俊
夜てのうらみなき世ぞわらけりし(リ)めかあや。乳のおすへと云々

乃賊しるや。万斛数千とさ化咲矢を備。翻をめりて。浪
まもそやをかくさ(ヌ)。まりしお郷をたのひとと触を防く
針賤ハあつし(ミ)。齋なる衣をみ〻そて八鳶のつらなむ態
まかるべからず。(ス)行きても。隆子れがるも。早葉往くるかかなる
もおもひ样まうるまで。いくばかりの子ひをすつれ(ム)虚死仕
て仕合よ。東西が袋を逃ひかともがに捕まてるまれり。張
満り文いこうききなむ。(ム)武ち彩を頭にさげて。児童の戯とすれ
あるひら半の用よ髭をぬき行て。老の悔を銘き化(リ)。あや
まりて急鼠とあれづ〻猫。濡鼠と笑り猫の文よ吹鼠
とらるしこそ。人のゐまぞ嫌はれねそ(テ)。ふさへりれしなぞ。饒
鼠となるとて。流猩のなぞうひてう。あさまさしく罪よりをれ。(ヒ)

はつしめが考へきを思へば。日よみの神に呼まで。位司の甲
可ゝば。臣敷乃かしこきも。甲子をむかへて。年ゞ號ありそとめ
まふでし。何しらの者も多く訪べ。子乃日の御賀あれば。子祭
とさへはべるぞ。大黒乃長者の傳へなるが。かしこの使なれば歎もまた犯
す。海鼠やっとしほの藻よななふる海にて。海鼠としかく[illegible]
旅人の尾ながき木にたるに。田鼠の化しこる也
翁の羽も乃翩士 夜ハふくつらともかつ神る。象とした所
歎すらが川 恐懼ぬる。麝香鼠も覺ぬよ行なが神て。
あと壁に物をかづく書れしるやうなるハ。鼠入れ絵寶[illegible]
おそびくさ乃ゑぼしを七郎と八中も。新左衞つとしてまちるハ。[illegible]
やむすりて乃ほなれべし。大ねつ出家。將其日鼠

名乃[illegible]くく十二の子をうむ。猫が家よりとわはる
[illegible]むしく曲す出く。猫の聲しや夜とせしまむしめが壁一
ふづくれがらすぞや。武藏も鼠完まや。お羽の滾乃鼠
か関かくりに傳法の奧に鼠宿する。月かなる[illegible]さとりぞ。
かりそめ乃世諺ひさかる。たよりゆらんちをおまふさる。
窮鼠くつかて猫を噛の志ありとも。三井の頼豪が。
まさ乃かき[illegible]ひするが。こを遂るすハ。[illegible]こきとく
ぶりくるも。

旅賤 弄引

許六。

旅ハ風雅の花。風雅ハ過客乃魂。ゐりしハ祇の

見物しハ。芭蕉翁乃懐旧なれ。奥羽。白川の田植哥
を吟ひ。奥羽の名所をめぐりて。る鏡乃古蹟等に。兵
者が夏を聞し。あつミ山乃を涼よハ吹浦を詠
め。作法に横こふ天乃川に。細道乃枝を志折
る旅より蛤乃二見を語つけて。七百二十余里を経
たり。あしらひが應答乃力量抜群して。一流の鍛を鍛
く。風流を専とす。且しひ芭蕉庵をもらお。僧乃
雑談に乃ぶ時。予に旅十餘の俳を咄きて。談じて
何某が求めに應ずとも。又風雅よりものか。俗談とお
つらん。狂賊五段とあ段。あれし奥乃細道。等
桃乃類にハあらじと。

「旅店のさま。上段ニ書院座敷。寝所。夜具なども。犬の尿
大槌にやぶれかけ。門口乃入湯桶。さしかけて有るわ。
庭ニ小狗のさわるハ。夜べのおうもがりし。女の声を
問ハ。居なをとらど。根太板坐なハ落て。隅しかまで畳を
於ず。天井襖も。あまりふこさいづめ。鉄行燈ならべく。紙
そまらん屋乃やうしのみ。中に旅人わ。諸出費。茶漬に雪
出かされが。りしに。様をうかづきを。紀寝入られたる。さ
し。旅商に夏を咄す。出足ハ七つとひかて。児名を侍も
旅人を真夜もよく寝て。夜おあけくかさめく。はか
なさし

大名乃寝所でも。旅するまさかる

あづまの上総いくさ。那須の胸ばらしとみえたり。から錦也
しと見えたり。馬さしとつれし合。一僕乃孫にさかる花
祢めまりし。錦乃あかねにつまの男を記し。挑灯と成
して。紅葉をかりを手折とし。入湯の一事に入さだめ
仁乃ゐぞや。はえの花葉にあるのはかりしといふおもき。
「世話やきれなにあきて居旅の宿としいふ句もあり
「借りかなへこそ。
「漁夫の業成ゑに。餅酒のなき飛もなし。摺(スリ)針(ハリ)峠(タウゲ)の
餅とくらぶ。素手鍋(ナベ)にもおそのかしきか純見ると云
也。寒気にも冷(ヒヤ)素麺をすゝむるハ。西坂乃茶屋。饅頭(マンヂウ)
のほりしとみえしハ。見ルに甚世。卵(タマゴ)子の煮(ニ)ぬき也。

本草乃様なれ共八作にしたがふ。舛の肴板ハ鵜を付
たりし。鶏(コニ)翡(ニヤリ)乃図ハ何の坊く啄(ツヒ)ばむぞ
「烏子けふ春乃蜜(ミ)柑(カン)や宮ばかの山
「舟川のとゞまる船の情。夜ばしかぞへ下りし。夜月の
大名もかわ侍乃手飯から出入。おのが本家から見ハ流るまでも。
首ず付乃侍衆を納(ナ)して。たびら見憩(イコイ)をはぐくみけれバ。
諸国舎客の賊(ゾク)なれバ。百乃侍客を何(ナニ)者(モニ)げとおかし
くる笑きなる洒落(シヤラク)也。天流の中が流ハ。ある人是を見
にまふ余ぶ人て股(モヽ)ご付入て。荷を肩にかけて居る。あがれ
ぬる顔をまず度しイへ舟(フナ)梁(バタ)に立。面(ツ)取が後とかくる
きる八淀し傳の情也。る士かる鼈鼻る。験てきに自ら

月を送りても。一盃乃酒よ。浩然の氣をやしなふ。一生
を漂々としりて。雲水の思を遂つて。家業の
日も。紫芝乃あしらいも。松乃木蔭下よ眠りて。蝶の夢よ
遊ぶ。詩よ歌吟を夜ねよつゞけて。せばまる世の念
ここ継ぐハ。迷。小便をたれしまるながら。吸がらハくゞの裏よる
至。猿八耳の穴よ納め。今ハ犢鼻褌よ結ぶ。一とせ乃名
残も差て世よある人ゝ乃てらぶく月日を出翫ちん
来ると定めらるゝハ。世をやまうとらる人ゝも似され。
出女も出がハり。旅本年乃暮
流浪漂泊のよすてり。其ハ纏ふるを先しハ不ほ名れ。猫
節をよハ宿をとかし。兼門下座よ二ツ段ハとめれ衣月女

乃新。霊験久しき寺よ。情ふかきあるじハ。長物くりのれ布よ
して。ぬ稍さる物と焼火よ向ふる。ある八二三歳迄の非と
以て稿よ志づくえ付て。志づらく足を休まさし。稿め乃札描
よわ逗ねろき稀て。却てのしぬおもわ股をすくめ。あす
乃ま小杖を携て。あゆむべしともらんでれ。人間病苑
の命まで八附も不もまさん。醫療乃為路をかうくゞ。懐
中路ふか菓ハやうし急病を防ぐ。巡礼兆臨の旅ハ路
跡よ偏き師ゝ同なる肝要よ進退をし迷。老後の藝
みそて門下よ入路さゝへかさるわ。終よ當泉の下よ
赴くかゝて何国か去となるらん。旅をまち大人達の古
中よこそ先く年の數。衣類の旗指を小れよ志るされて

何ぞ此いつれる人といふ名も志らをなかりけり也。墨水乃
辺堂の茎よ。経文をよみて因行の別を憐こ隅田
川乃念佛を幕て。孫子此古墳よれぱる。今更
古法の人。梅暁乃情を画して。風雅の勝をさらもし
鮭周ハ白川乃浒をよみて。二たびみちのくにおもむき
不二(フジ)都鳥乃二句をおもめて。すゑやうに旬てよ論る者。
自笑老人あれば。東海店のつすしも志らぬ人乃。風雅
よおかりくなしといふ称し。翁の来る年の庵ま
ししと云。

揚揮豆賤

毛紈

(アヅキノ)赤小豆あるる能く八一の俵よ納て。二よにりしあるふて是よおけり乃
仇名をれ。神農乃粥(カユ)をハ癖(ヘキ)をわすれ。卯月の花此牡
丹解らりしよ名あを思しく今樟乃いきをいはむと
とのくひひなしらいし。世よむ人をけれのたみあいわたる
名をねらて。荻のむしかさ揃てしれ。洲浩乃人ハ。漆
をもとしり世ふれ。饅頭乃席韻めく付ちら。アンと
ハ種ぐ子乃つえにあ識乃こひらけしらて。赤鉄ともいへ也
深交とハ。僅庵人乃名づきとある名うして。あつきと
解(トク)謎(ナゾ)かなるべし。薔(ブ)薇(ロウ)草(テイ)よ。君か店乃袈(ケ)裟を画ーし。セ

去乃詩を兄事に懐を述ぶ。従兄弟意。不死汁の石た。
いづれの御時にかありけん四殺をこまて又おやわ
乃竹よりも尭紀。張騫の糸につながれしも我かの中乃
一川に遊びし爆しむ終が大きさに燈ひぬに倉遅置
むかしはきよきくうくる堪鍛を持ちぬ。燕乃精痕を
鶚二わるべいる所小豆粥乃中分別ありしならん。

四梅廬ノ賦

僧李由

一、惠を掃ふまで時々窩に行みし。氷の為に用んとて
岩窟乃下に結ひもる世もあるよ痛に孫庇をお結
し。下則に志ある事をつきて氏乃竈の縁ひろく法を

あるは梅。武陵の蜜の舟に棹さしときく。今は楼乃つま
手をまねくひ。鶯は巣のやさしき。烏の巣乃なけくら
なり。皆おの梅しく生得なり。あるは杜鵑。ひとつ川乃
巣を営む。燕乃幺とそこひ。蜂の諾をくつくそ此根の
梅をたのむ。頬向の家をかゆれすきひにはあらで。痛鶏が
時に導ひ。鳳凰の威をなるはむしろ。凡鳥乃嘴つしか
ころすどころぶ山鳩が逸為乃寝と咲ならわれも心
ならしも寺く一日に閑静とみてし眠る。糖半は倉
寺破しむ。ひらかれては。又おく蜘蛛乃部とめぐ
抱乃貝の舎造作。業標乃薹は戸もつらね住みなかる
風雅乃ならは入乱まし。寡里寄居虫に家をかゑて

節乃哥合よりこゝやさ捨てこゝろ行しひのゝ

閑居賦

汶村

○廬山乃雨の夜ハ月を恋ひ。花を待こゝろにて花の
都の春を思ひ侘人もあるべし。しかれや吉野奥に住
うきこともなる世の誹諧のたよりなれハ。かりしすこゝろのまゝ
見き先雲梅野の行く乃。蜀紅葉の閼伽棚も横さまの
植えんずくさ稗。宇治山の隠家にハ枇杷乃風流を為
きどし入唫大きさ見えわ。をハ一りしのさびしきこゝろや。
おハくしの雪を恋ふ。始ハ東坡かトをみとりく
雲の底をこまかし。冬ハ雲風のさ世るまをとりて。公立さきとき

さとまかるゞ茶粥餻粘乃饌こゝに。兎飛を沙羅し。紙浮
背身すきびしき夜ふけ石を枕へ寝わ。渇いてハ山瀬乃瓢
とはとり。命を山家の風をねむ。手編一ッ。満二ッ畳。二ッ亭
来るの外に。手鼻の拘子を背にして。筵乃そくろへを急
自利乃自由をはなく。耳の鹿きをのがれ。唇一ヒトへに心を
声の喧しよを隔て。簾一枚に車馬の埃を避てさわ。
世を捨世に捨られし類。より手もなくて此ひとゞ社。
まことの不孫といハまくべけれ。今の不孫めく者をのみぞふ。
今にハハ孫を画し。酒にハ五味を好まし。捌板乃陰
にハ四季をむさぼるを彩りて。皮肉のにハ樟ミゑてう乃
名木を求む。額にハ花鳥きの文字を散らむ。軸にハ二ッ紙

今朝乃錦をきらもて宿をさ雨にハ五月を湛へたるをさ雨に
琵琶箏く琴三味線乃類ハ浄瑠璃の曉隣家
乃賑ひを覚へし。扨人此是をまなび粉白く黛翠
なるを此屋とつらね常に屋く紳装をきそふ扇を
先く隣に牡丹芍薬に数奇を尽し蘿鉄海石に賊を
つひやし加此ハ文政を久しく数よれし。櫛ハ金津を
きそうハ月の光を奪ふ。或ハ琥珀枸杞子を植て児女と
ほくの父文を瓜茄子を作るハ百乃店よおもて久部
乃傍屋に隣の生葉を好ミを構類の菓物に隣乃
養見をまうけそれ方居も彼清紫の方名と名を同
じふもや賢人ハつねに友あかず人閑居して不善をなす

是れとハけつまれ乃つん国しかりぬべし。

招蕉賦

文考

この冬は吾翁の魂あはれ。扨てみづからなげゝひ。そゝぎし雨に遠
よ洛を来むかし神無月十日あまり。湖南乃旧草に門人
あつまりしかど夢のしる後ありけり。今さらかならぬの事ざる
むなしく給ひし。猶それかへりて来捨ぬ薬門よ春の花ちらおつ、あ
難るこさて別るゝをうらむ。蕉窓よ秋の月落ぬれば人そろひて
假とどまりねざ給ハをきさるよ此佗よ此世中よ。何ぞ初
乃を我佃孫とハよそく世ぞ。吾のゆ来なくしもゝ
春の居乃緒よかゝりしや我夢ぞ。吉なく是ばとたえうしゐら

こまかにしてつかへるにふるみちし還来禮しくいま猶ぞ
しを草とかいぬ。藤葉の香にや衣にうつりしむ。
うしてもむかしの梅よ出てよまりのはなどかゝりざる哉。
魂すゝみん還来まし。去年坊は、此日ちあるじまゝ
きさらぎのかれ蕎麦切は宇治の山のの細さに深きは
あろ称ど世ゝしのんでまじざればなき事。豆腐を
表にをしれ紙ちぢりき。蒟蒻は是ば乃宮の名に更へ
聖。いかで世の人の風味にあまりしらんや。琥珀の雲
をふるは栗飯ぐかぶりしく朽残の沙を揮へ肴は酒気
にみぐりむ也。香茸を見ばさばかりなる旨や。土筆まで焼のし来
まぶしたり、品何よりありざる世。ざる波や。折々の淀に

むかしおぼゆらむ。あ梅とみが待て、山家にもし、長
等路山の山添ちぞ是のあさくたる趣にさ記ちき
て志賀のたびぞ多しくうかまりて、かの辛崎の松の孤
りこ。花の朧のちまわやはまする秘む。粉にはつ秘ひつゝき
あれのこゝろ根に。入江お駒とむべき人しるなる秘。むかし
堅田路。秋の夜をよに落ては。藤の穂をふたゝ男を
隠しかこを接のたよりはきう後なりぬ。さ傍にあらざれ
哭かん君のことさむらん後出の面かげも。今宵は待人
あるなしぞこのわ重ね。松風の音羽山とうや。きぬきれ哭
を雨をぞ花も咲きとも世に名を題ゆる関は息れど。雲は
乃兼のいつでや、ぬらん魂して不海る来禮。世にいふ天臺

さ。人乃んあまし。さるハ風月の情る手とらん。北嶽ハそで
お諸そにまして風雅のつてるもなくして森さ神ぞ
弥陀かけまん神ふりとて、いとをふとまふおかせぞ。
たゞ山に於ればの更繁ぞなりしむふ。琵琶がさ川ハ色の
ゆうして桜花の色を手にもりおいさ字。稲王宮
今とも。さらで世の人が見他のことをむとするむ。そもそも
けちはんもあらうし。志ゝ侍ふ杜国荒木がともゆるゝ。
圖司行かし。岐山乃落梧まで。尚誉乃ん備
まじきとも十ゝ勝ありける俳諧の書ふおもかねられ
なぞ続もんゆうなまあらて。おはよハれとはかしむ
よ。獅子がきましの継よりうむ。御まてすとみえさ

むやきよりしぬとく俗りきく袖むりし。俳諧ハ俗言乃
信あわとして袖く、さまけむよん侍。然おおりまさ俳
きよひいづまりり信みりらんと俗を見をとりて世をいとなき。
俗をさもとりて推世をさむたむしとせしふ中流をハ以
を信あるをとぬるすぐる袖て、信ある人ハこのまこと
なしと俳諧を俗ある人ぞこれハ何なるとなりとよ路る
そも又炭俵。段褒袋に意なるべし。今や俳諧を。
信あらざるものゝもごとい あむよ。世を捨をまちさを
とれ。路よりくもあらぞ。ことあるべくとかをみて
すあるさるりんやけ何お魂すくやくに何とまえかへば
吾羽ませむ。免猿よかへつま来猿。魂張て俗りて来猿

○譜類

百鳥譜

支考

○鶯ハ紀家乃序にさへさらに人にちかうかしづかれし
陶淵明にハ遠慮の風骨ありといへることハあれど。鶯ハ淵明
が風流あるさまをもてれば。されバ世をすての世乃あさきりに
ひとしきなる時。東門乃月のあらそふにまぎれの程なるべし。
此ともがらハえんまく生れて世をいとふの鳶の世帯もなく。
衣裳も古風そうに似たれど。おほくして風雨をもいとはず世
をわたる。かの荘周が夢に。胡蝶とあそべるとも むつまし
とやそおもはる。

雉子の声こそいとをしけれ。雨気の程をのみ待ぬぞや
あらんといふ様て。一翔にも雨付余所に落しぬるハ。笑ふに
韓信が古き乃。文武をはしさて乱なるべし。
蒼鷹乃人をつかみけれしく。眼の内におもしろくなる大器
とろかへとなるいとかし。さる程に一歳に名おほきもとれたり。
世の人も程にゆるしもたまふべし。
かの斥鷃が蓬生乃宿ハ膝をいるゝに足れバ。大鵬も
まさ乃万里をうつやうやく遠し。さらバ其の程を志たむ
のこゝろしてかなしう涙ぐみやむ方なきもあれど。彼鳳凰と
呼ぶハ此ふれぬまよりあらむ。
稲負鳥呼子鳥しくや。うたがひて真に須かりけらし。猶

ぬ物ものまで。椋鳥と樫鳥の二鳥ハ、其の實をこのめる物の名
なるべし。木つゝき鶇とはうたがはしけれど、なをあやしきすゞ鳥は。
むしんがね。世の花乃咲こぼれてのちかのきぎすにまがふも
はら。鶺鴒の羽うちて、ひたすらに跳しかとも、さる程ハ山
名を鶯乃まくびをいつれまるんぞ。その形がかさなり鶏。名をも
ありもとかる。白頭翁乃まくびなるべし。鶺鴒をおもなをし
あし蘆をいふまでなし。自他の理ハ其やまさまならどおもしろ
斑しうちわびをもかざせよし。
雲雀ハ晴日に囀りて、すでに天にもあがらむ
けしからぬ小鳥の声をよくおぼへて。ゝ羽乃田ばしらなし。
物し嘴出ぬるふか。おもひを鳴音もなかれバ。あの鵯

さ苑しこゝろもあるまじ。おもふ所もある也

一 二更ハ啼ル時ニ用旧里といふよりおもひつらしもの
ハあや。蜀魂傳しほとゝぎすあかて。この鳥の山にありて住なれ
もおもふ事ハしられ。またそのみ声の尽。法華經と唱
ふるなる。世をはかなむ者めでたる事也。提壺乃婆酒を
かひ。布穀乃稼をすゝめしかとも。是をの鳥がゆへなら
ず。世の人のしるしこれを知る。蜀魂の不如帰と
啼くとぞ。きハまりて拙劣の声ならんもの

一 秋の夜にはおもひ折しも。時鳥の暁乃空にさまよふ。こゝ
ろさへはしらん。夜こもり行を。かくして誹諧ハ出来し。

一 鸚鵡ハ恩をしれる禽なるべし。此国に八十ぜんしたがへ
よくものいひしむかし蔡君が鸚鵡ハ秋ハ霜が身をうらみし
隴乃名を呼はれしも。んをつらし。障泥のかたね。
おなじく名をいへども。おのれしらずといひし。鳳凰乃
詩なりとハさしもあるべし。西の鳥の声も。あたこゝにて。
万里の外をつたひめぐるとや。扶桑十勇志八ニ有飼鳥慶海暴事君之故事
ゆさへおもひかねたるべし。

一 燕もゆかりハしられぬる也。勢利によりて人へ宿。今ハ家に鴨て
館よりハかなしき時をはしきさるやれど。沼沢の僧の一枚
二夜まで契りて君をそむかぬ世をさるがことを経
て後ハ人まつねんもあやなき節ハ折勝の見えし人もまた
おもふ袂をの説もおもひまんなん。涙乃こぼるゝハ心が

なる時はおもしろからんが此汀乃。眺望しるしなくば、さびしかる
べし。孤村に出て夕陽を帰帆ませば。漁り舟より今まで
霞もおもしろからんと。ながきまへに夜もおもしろかるべし。
鶴鳴とは名乃如しらぬ鳥の也。まれまれの蘆の面にうしろ。
推遍子乃魔をおどろかし。黄昏の時の雲には旅人の
海を催をすゝめて夜帰ごゑをかれしきたに。夕雨鶴は隠
逸乃風情を述ぶ。
翠岡残夜乃おもかげいかなれき浪そ、夜乃ちかよれ秋のあき
あつまりわたく帰はんとも、きゆべきまして、かなし。夜ぞ人の
旅登なる所よぞみ、秋浪も心に深く入にまかりて
あそぶらん。戸をとじかね、中々ならる舟に続て急

あまのすそわけは、舟あまくしも遥よ入りて、ふた浦風にて
と云は、雨あがりは、さうざうし人もなくて、何かと寂。
鴨は、ちりしてそら湖乃あつ風なり。馬蹄とも空に浮ぶ
汎よりひえ人をしらざる旅はらふいそとて、かふし。彼湖乃
夕暮は、江山の風情をまとめて、猶ばりかき見て此雲夢
とき江しし。澤は、いかなる城より出すむ。
向路とは人をさげて、その絶勢あるるものなれ。ふかれた
練越乃。を出結帰して人をさびしがきしを、むさとは
なべて、卯のもお黒とは、と浦々をたなるぬ。夕日の紅も
あおつるよしそうりをおしては、おしろけれ燕も帰也
争よき乃さびくに、まとちたかひもしてさびし。しかる

ひとへに西行法師をかなしめれしや。百花の深きになるらバ
強須ねるともいとハざらまし。
緑苔(ブツタイ)新芽をよくぽたいあやきぬるへしとおもし、かならず
此の紙によくくちよきる意も奉ら候。さるまじくハ
来信にやうなりしも市中にあそびぬるなる也。
深苔さに位なる雛ハ、七ちち夢をも中たにしてハ世をまんだから
まぢまもちくく。ゐまもきくら候。要の徳乃静なら時ハ
こてもせしくあそぶなるべし。
嫩(ケラツキ)来鳥の飢(ウヘ)をまのびらてまよそひ糖をぞくきしある
さてハ後の河のなしぬてらぞるなまきしさ候バかぎりある
きまなの心とさとしなるらバ。証もし、このさまりまるり

おほりるべしさ紙バ空山乃月影に。雪色をさげしやきくく。
摘(ツミ)乃梢(コズヘ)もちるまじしま気貌りしらてハけちる乃夢若の夕よ
藤(ヒツ)まして心さや。張居士が家をどふらぬ人にも似ざる哉。
あがくし拙叔一鞭時ありしてものやまハ時もなかれぬるを
さしきるる旧乃形に称しら。さしも猿なきる深きにまる
かぎりあハまもゆるぞらわも家なるぶ。地乃家のさかとさて。
まってまもあへぬハ、いかなるるまより侍らんといいけもし
おもハ新也。盡(ケダシ)鳶(トビ)なぞれ、ゆるやらに寐あかりても渡る
るさ我がきし家待ハ、何ハそらしくきり。
新の蘿乃晴をよろこびて、何やし静のかすに鵜の花
さ市少(クマ)人さきし人侍らん。雛ハ暮信乃風情まきて。

人乃徳を慕ひあつまることおもふなれ。家賂もおもはゞ富貴
あつまりてもその徳が身をおもしもおもはゞやすしに汚泥をも
けがれとおもはずしてみを世の外にすてんとおもふても
ねとおもふさゞりし性をかへるこそ世の人おもふとも
しかれへをかへる翅も。いかにをおもんぱかりよ
あつまらむ。徳ありしあらば徳むべし。
世に人を葬る者あらで。堂に奉りて見合んべきも
あくねんなり次へよらざる徳で身て酒乃ませ。價なきも
やまれけるれる時とおもひとれ。恰なきもるなんやし。
罪にも魚をてくずあきたるどの徳ならぬ次ともと
餓してもいけりべし。されどこれなりしがたきやんひすも

あらがきよ。人乃よふかり徳て陰をこゝろ魚とも伊勢
に墓まくらぞ徳をみてさうしとさて見し。昔の集共
ころぞおくてもおくて徳もまゝる人で。皆よわたる一しか
もおもしけりんば。鷺ハ飛の下よ身を人に求めて
挙ま続人ともそら徳もひとり子をて世に経て名の為にも
なぞらばすめべし。さらば此ふる所のことれを家なと
なさが。弁をさきまろん乃いとまもなかりん。
鵙ハそもちるふつ徳なくて。魚つ寡ねこれなるがなど
おもちらバいのかおもらん。
啼の風情ハいとなるめりし。何かしら中ねが。いかに
人をを思ひそめて。身もも身をで家ももほつ憶て。

乃んもさうひかなしう候ど。色よいせしいしとうこ志のふ
なりを纔。さまで田舎よりも鶉おもく。田螺ふくまよふ
はらゞなふさしくさるとの、ずとへともおもふことなれ。
翡翠(ヒスイ)乃翼ハ。一葉の枕よ殺るま。驪山(リサン)乃契(チギリ)て。万里
乃雲をも隔川。朝乃嵐よ。錦帳を誰さへ忍ぶまよふか
影もぬるゝたびハいかなる支なし。志かるハ翡翠(ヒスイ)といふ
鳥ハいはうなれ寿人乃毫よりあらむ。杜子美が衣裾(イキヨ)に
住りもいつるも。ばちるかなしてかハ。あらじ。名よかぞへて見を
乱なとしなさば。しま人まやあやしまるむ。名を定
まれはこそ姿乃おもいなれ。翠乃中ハ是也。琉璃と云
名をぞ世外人のそしをとも。かさ縁るなれ。

「鶯乃声ハ。滑(ナメラカ)にて。鵯は信木も聞かしう候ハゞ見も
寿サイ乃をとぐひよハあらめど。風情やゝおもむきやら
ましてまなうぬをいふるなりしもそへつもあるよ。
鳶(トビ)烏(カラス)乃世をさぐるる中よも。鳶ハ鳶乃いやし
きこそのちくあるじ。夕(ベ)よハ寐まじひ。朝(アサ)よハちひはやく起て
森栽乃まその実まどにつきてもえ。かきひ捨まやハいか
なる時よら。息などもつきあがる嘴でいとじめく
さわぎふ得るなれども。林乃つりひのとなるべ
かくはるまじいいひもせまじ。
或ハとうなれ。蒲の巣ひしぐすらることなれ。死骸乃あり
を嘴(スイ)つゝ。かくもをれハ。魚を探て侍る。文鑿

をえらぶる鳥のごとくにして。ゆゝしやかなりければ。珠に備
ふる度なる。へし鶯乃さえづりのかゞやかしきハ。さきの枕か
なきを尋ぬるばよろしきやことおそ強し。
おのかしてあるおのに知らざれとおもへ。鸕鷀乃一名を沉
溺とかいひ。倭名も行ふるといふるもあまて数多ハ如り。
ふごにきるやうにはゆきど。筆はさや涼しげの噂を
とかしるゝ。かしらぬ河にてえが行くしむべうくこあなと
なきさば。楽桃乃庭をもとにちらし桃むべし。
世をば保しといふるありて。果林乃さかなをとりて渉れる子
木文字なし。されども菓はくらふる所。終にてハことを見
たくハなしめれ類るもあると浅きあらし 峰に文へ

あつもなりて公冶長が学なしればきゝるとぞなりし 一説ニ一種 遊ヲ好 鵝ヲ好鳥也其餌ハ蕎麦白米ノ類。饅頭ハ嫌ナリ。 殊にきゝとるなりしものが世ヲ
ありても又論なし。き飛にきしぐへる 隆鼻鳥を
出ると人乃の恩をきるべし。愛宕高雄ノ山ニ在テ。杉ノ木ニ棲ル鳥ナリ。 迦陵頻鳥を
那乃義におかれぞれが。家ハきゝるぞ。かの蝙蝠やといふ
をおすしきさかハむる

百花譜 許六

遠世乃人の花ゑ。古人の實すきそ花づき乃時が来
實業備乃世あらむ。
梅乃風骨ふるすゞ。陰季乃井よ似ふる也ハ花あれに。

青月一陽乃気よ。儚しくるる江南春色。梅ハ北枝ニえんきん條
まづ生涯をおすまよくるしご風流の情もみずよ旅する。者
をも主としていたど。吉野高尾なども以ぐよ遊君乃たんおよ
あつかをしぞねを恥い気さくる心よわ。桐火乃高き堂かくちし
痩ぎれん。深き縁くぎのみ乃香よ飽きるんもよわ。一元代
来らは夜類調度なるじふきさひ月よも、かき花。今乃
おん様。今られは男あまどども。恩厳なるものすわぬき。結
出さるし儀ふをも別してけつしぜる男乃一言ふ面目
乃寝食き銭かいくわ。借銭乃利よ利をかさず。やりし
置しも色さうちぞ生おお乃おやきを迎へ。起なんし住来よ
朝とも乃嫌をもそても。粗あすき流流乃細をふ留めき。

ひきへすくてぞ甚だ乃床頃えもやんし。待るすもなくて世を
静まりしおみ。閨完れりくしひをおきる今よい似たる
紅梅とはよ其ハ一度傾城家乃心を飾りし。来閣外の光を
くれらねまじどもやぎて蒼くぞま。もむらきてもわ臣しき
平線へ当風を学が伯よ志つまくばかなる色を安ふ
あらへバ三十色さぬ郎乃。大躍よはつなるとんなつつき
風流をきくわたる心地をす事。
桜ハ金蓋乃傾城なれき。天晴当風よ升てとくる流傳
切りま消えのあくいし乃。一点も香花なれ。
海棠ハ何がく肉を結ぎる野ぎ乃大夫とし作が結構
ひもさりじふ世中猫とのつ志まども。代覧まふよしして

くる泪ひめし。路に香おふされ一色の。なんとなき心地ぞせらるる
うの花。
梨の花ハ。唐の楊貴妃乃傳にいへる春のごとし。緑川梅雨ひ
まうちあびて。たゞよひたる人乃下にみえて侍るがごとし。
棣棠ハ。ちかき野であるの人乃。ぽ。書とも公卿ぞるが。総手かなる風
俗とも似まれど。あわれる宮に家を治め。身を修める事
すくなし侍れども。さんが若き女の袖へうちまし化粧す
そお粉をぬりくさねど。自然乃よき花なり。
桃ハ。えんなる姿しおもむきあって。梅桜乃匂ひ風流なる
乳のもつれをいとへど。下司乃子らも化粧し
一臓を飾りくはへるなどし。嫺嫚しくみえぬべき

中にも。前髪ハ耳乃あたりに。産毛ハうすくあるて。いと
藤ハ。桃花乃ぬかくさむらぢ。なめらかに垂下りてなまめ
いとおぼゆかなし。
山吹乃きよきさかりる。眉目容すぐれ。鼻筋おしとほりて。縹緻
よき斉に。麗なる袖つきなど透徹ただしいつるぞわれぞし
て命をうけてよしおもはされぞひて世乃なかとハいふべし
それ。
めずらしきハ。薔薇のきびしくひハ。お白らけして。粧ひまるきハ
袖ど。え来いやしなむ乃。様よさるひ久しれたるもの
多くハあやしきとい入れけ辺の。日おくりて状詩篆。世上に流
し。ぬぐさるおぼへて。ゆ。ゑらぬ袖をすそし。あけまちら

はかなき媛袖とまかし。姑もなく絹も気にかゝる所なき
牡丹ハ一寵をを時を得たる嬖女（テカケ）乃天下よたちて僥とんなる
折からわが妻ハ嫉妬（シツト）我慢（ガマン）のいかりぬぐひしもの。青天よむかふ
吐息（イキ）をつきたる風情よ似たり
芍薬といふものハ心やすく嫁せざる娘乃よわひも二八よあまれ
るが、おほげに見ゆる風情なり。
罌粟（ケシ）ハ眉目容すぐれ、鬘なく妻ハ西施が讒を避し
て、瀬にて睡つし。浮世なしのあハ露ぞなかんよりけむ
身乃一生おくしみよわて只そと散（チリ）ばて尼となりたる
事、所（ギヤ）のふるしまおまし。
杜若ハ難しときも也うれしくき女が盗して私をあるね

すり似たれ。
菊やめハおぼくかなる女乃閨を病る化粧です有。
百合花ハ数点おほし。笹ゆり携多（ハカタ）ゆりも鬼百合も八美気
ともにみな一種よして、生得華しお花なるしたたよ興車
よ移まれる佳なる待ばかくえ事はよくかくをあげ、とづかり
鷹（ハヤ）そくあおむくむきる女よ似たれ。
姫百合ハ。十二三ばかりなる娘乃容（カタチ）様よ事ふりくしくも
ながらなし。
合歓（ネム）乃花ハ衣の様なるハ。深閨の中よ縫物をかくえ居
女よ似たれバ、さまよ客乃いりあるよりあわてかくるゝ
まなむじしおぼけりなし。

一きりしまの花は紅乃目をうばふ。咲にちる花はなにて男子をまどはす女のすがたに見えて心をなやます事けれ。かれあはれさまなりけん。

一紫陽花(アヂサイ)のむらさき色白に眺めかはるが如くうつりかはる花。

白瘡(ハクイキ)乃病もなくてすきまもなくて其さかえてやさしき。

一蘭はうつくしき香をなしたゞへば手乃縁よきかほる。

天人の顔にひとしく不思議にしてこゝろ仏めきてかほる花。

一菊乃花は才一名白うし時分乃手くさはかなき花。

おほくの草木の花といふ人もまた式部。

なかの卯の花月の夕ぐれのみよ。さかりなる衣装かな。

思ふ事はなしける女子もつゆさる事はなり。

なくさみ種ても花のほども枯つゆなく見ゆへきやらん。

新しき道もはかなく行かふゆかしさらんと

いふなりけり。

一朝顔の盛りもくれなゐまきぬ女乃墨にはかなきを

一太閤は大事に末に乃月の日数乃

末の木かしき色にさだまりて清きさま

はさしくを折に紅は衣装など

そくの世の中に…

一撫子や和乃花も女乃一首の…

まさりて候べし。

一つばめの杜は蝶の羽に…東乃…

ゆかしうぞ侍人乃面影もうかびしられ候ばこれよ光を
ちぎ給ひては戸を閉ていまはし
「風俗といふものハ見もけがらしく。紅粉鉄漿(へにかね)を粧ひ
ひ人の眼を驚かさむ女子紙ハもつとも小筆にてつかふべき
ことにもあらずや。女は筆つき乃いやしからずやうハ彼女
乃李(スモモ)冷ロにしるべからず。
「女筆といふハすべて女のかくものなり。秋萩帖筆破
戒にもゆめ女筆ハ女筆乃二字までなりけり。紛れ女の風
ことよ筆め紀ありて候も。菊よさ紀をかきし候ひしハ手跡
やさしき紀ありんと。女人物すきなりやさし。紀け女筆
なりといへる也。おもしろくして清らかなり。筆んハ女式なり

「たきを挟みて。小筆を男乃筆跡をおぼえて見るを嗜
所といふ也。大弁(オホムネ)ハ女筆にしてかざりなき筆ばく大家をつぎ
ぐべき。縦ん乃さばきもなしさ給ばまして男女共の
まじはる類にもありて。男女の中よこそ風信也。此紀
筋にも類するものなし。古人蕙栗(ハセフアハ)乃むかしよりつたふる
草書乃うつくしくよみすべき也。梅(ギ)も花と筆(ヒ)しく黄
うして下葉すれよ縁かぬる。彼は花の
ひとやりなん也。
「桔梗ハ色も目を喜ばせて。秋草の中よおもひは
さい咲く中ハ田舎にも家の戸よ見物なん紀も蘭
「蕣ハやさしきものなれば。してまよひて愛すべき歌

すまされし。荻といへる名目まで。人乃心を誑し侍るぞ。た
とへバ堂下乃女のよく許よひしときてはさまへさるなりけり
さるハ似たれ
「菊乃屋数多なるハ。和漢ともに名あるさかきもなし。されど
ども京乃みやてをさへひどし。風流多好(ズキ)。目をおもしろき支
を嫌へるハ。よし此女乃あはれとおもふにおもひれて閑なる所
をつ徒にさえのびよひひも。いまだ二十にもなるやならぬを
乃盛多待ハさるから数寄なしとお袖をたへくもあらねども
一人(ヒトリ)あるあさきあれこそよひの袖てん。なしと世中に
侍徒なるたちけりしとおもへる人まれなるさか。
「鈴菊乃露をつて。言葉をとりける井よ。息為

を雅學を画しまさるハ。天地造化乃妙に神さへるをよ
形しと感せしまさとへバ越路の果にもさても。之等会ば
富沙(トサヤ)るほどなせしありし。よ。おもひもよ風流ま
あるんぞ此をすば。
「見る牡丹乃艶やかなるをまづ大津佐見などし会田
獲たる所の雅女所。工高乃家乃新をなせるへ。お交
三神ハ其桃のむしもやども。傾城の風俗を見習ひ
事(ヤ)文入(ブミ)生(イキ)方(ダテ)玉の黒かへつまに艶やかまを画し。一扇
雅女乃立振舞よ似る神ハ両(フタ)瀬いろとも出つと
制しつるひみとあとをまつざるハ。大きなる笑なる
事し。

當世乃人ハ花色に古人の實をたつぬ。嗚呼いつまて乃俳
人花實兼備乃世あらむ。或問云當世人情の花に
うつりぬ。今ふかんを翫しやまされハおもしろきに文章
に通して、せしめて人ハ耳目を驚し侍る。今先生か
歎く不乃俳諧の實ハいかに。こたふまつあらんかなかれ
つなしてやくこと禅を悟して、その心ハ大道に悟入させよ
蕉翁云史實ハ見るにたへたり。荀子の都乃ふかくしなし
ある實性の人乃鑑たらむ。若男さき斗
乃行よるむとおもひたちやまとけるにたよるへし。盛
氏乃先祖ハさんちや風乃伊あらむ瓢乃もとさ戻る處
趣旅の其外ハ郷下にも足らハふくくして今牧ハ虚
そとともに民やあ乃利休の茶湯ハ於る雪舟乃繪に
まて其俳諧乃實にハ究りて侍れ。

山水ノ譜

許六

○それ山水をゑかくに法あるを。丈の山にハ寸の樹。一寸
乃馬にハ豆粒の人なるへし。遠人にハ目なしを云
む。遠き樹にハ枝なし。遠水ハ波なくして雲とひとし
かるへし。岩に二面あるを見きて道にハ二乃岐あらむ
ミへく画に遠近を知るを十一とん。遠山ちりしを
すらむ。遠水ちりまれとまじハらむ。林木遠きことありハ
疎牢にして近きハ二ろ密なるへし。草木あることハ妻

やハらかに。筆ふるべきものハ硬ならずやうに細く。石ハ
堅むるを本とす。曲直あり。古木ハ節多くして。枝ハ死をまじへ
し。四時乃変化をあらはすべし。山乃浅深をあらはすべし。姿
樹深き所にハ。寺観楼閣の屋禄をあらはし。水郷山居の
間にハ。酒旗乃青白を翻すべし。古き王摩詰が山
水乃賦の法式なるべし。やかましくいふとも。かりにもまくるべし。
き。神社とも城ある所にハ。天守を聳かし。神社ある地にハ
鳥居を出べし。山石水木ともにやはらかに。構ハ和画
に和にかくを係りて。これ和漢各別乃沙汰なるべ
し。富士ハ下野長く。京大いなるに出べし。松原ハ浅く
まじく。京淀にハらべし。紀河ハ京をはなして画くべし

九世戸ハ景象多くして。霧しかるべし。須磨明石ハ淡
路にさびしきも。吉野龍田ハ花やかにさびし。住吉ハ神々
しく西泊く。泊瀬ハさびしかるべし。六玉川近江
八景。帆乃上をよく知るべし。唐乃倍。和の江湖をつゞけて
いつもあつても西湖の風乃西湖よ十倍まさりと和画ハ
浪を写して帆ある舟をなしらず。唐ハ西湖ハ水清く
して人乃瀬みて湖にあらず。遊人乃ゝ舟のことに
て世にも治まりし清舟乃繪とぞ。切に泥金を紀ちらし
丹青鮮かに彩り。蒔白細繊に文を書く。奴乃類壁
に墨を点じ。傾城の顔に丹を含む。是桃らきを遊
をあらはすもの也。假令丹青ハ濃くとも。治まりし体乃景

色ハすミいろく淡き乃部にして。其人の格式なるべし。
すべて画図をよくまなびこれハ先風雅を志るべし。
古人画中ノ詩。詩中ノ画といふる。是不なるゆゑや。世よ
物理すくなき者。気象を切るすを知て。臨写す。さればこそ
画工ハなく筆を知て。画道すなはちをもてなされハ画
道の志るしにて画道すなはちを志らざるハ。何乃やくにたゝむ
事多からんや。